

人類平等の眞精神

「一切人類は平等である。」それは釈尊の大悲の叫びであつた。我等は親鸞聖人の教化によつて、このことをはつきり知ることが出来る。

一切衆生が平等であるとは、善悪賢愚男女老少がないということではなくて、善悪賢愚男女老少がありつつ、平等だと言ふことである。もしこの一切衆生平等の自覚が何等かの形において生きて来なければ仏法ではないのである。

仏の大慈悲は、一切衆生において平等である。であるが故に善人よりよ悪人において厚く、愚者において深いのである。

この大慈悲が南無阿弥陀仏を通して我等の信心となる時、そこに様々な新しい天地が開けてくる。もし私に仏心が知られなかつたならば、私は一生涯、大臣大将のみが高く尊く眼に映つて、一文不知の老婆などは存在の価値すらないものと蔑んだことであらう。そして自分自身をもその眼で見て煩惱に苦しんだことであらう。

大臣も尊く、路傍の老婆もまた尊いのである。したがつて官吏の仕事も尊れば百姓の仕事も尊い。

それが内に深まつて、自己を憍慢と卑下から救ひ、他の衆生にむかつては、尊敬となる。

一人の悪人が現われる。その人間の皮相だけを見て、それによつて動く。その時そこには、冷たい裁きと、異常な動乱とがある。悪人はますます悪人となる。

しかしこの氷の如く胸のとぎされたる人の背後にも、如来の本願は働いていなさるはずだ。合掌してその仏に対すべきである。言々その仏に語るべきである。

宿善の春来らば、その悪逆の氷を破つて、如来名号は開いて来るのである。かくて成仏出来ぬ一衆生たりともあり得ないのである。

もしこの根本的な生活態度が出来ていなければ、その人の存在は、常に円満を破り、温かさを亡ぼす嫌な存在となるであらう。

一切の人に合掌の心で向う生き方は、その人の生活を易行道とするし、その人の周囲は美しき花咲く花園となるであらう。

人に教え、人を叱り、人を導く者は必ずこの心境に住しなくてはならぬ。

宗教はいらぬという先生が沢山ある。児童を生かし救う如来に教法を聞き、一切を供養し、合掌することを知らぬ教師である。教育そのものを破壊する人である。

如来なく宗教なくしては、眞の教育は成り立たない。

人の上に人もなく、人の下に人もない。一切衆生すべて仏の徳の尊さを發揮せねばならない。眞の平等はかゝる尊敬と自信との上に築かれねばならない。

このことの徹底的自覚が過去の多くの聖賢を生んだのである。

しかしてこの自覚が社会の隅々にまで及んだ時、社会ははじめて明るい社会となるであらう。

聖親鸞や聖法然は、山の上に封じてあつた差別の仏を、女人禁制、愚悪排斥の山上から一切衆生の大地に開放した。それだけで、釈尊の真意を生かすものであり、本仏の真意を知るものであり、やがて大聖者たるに値するのである。

日本は大和であり、「大和の精神」に生きる国だと言う。

仏教が輸入されてはじめて、仏の血が民族に注射されたのではない。仏教によつて民族の血に潜在していた観音菩薩の大悲が、聖徳太子となつて示現し「大和」の精神を発揮し、生活し、叫ばしめたのである。

仏教は決して外からつけ加えることを教えない。

大和の精神とは、自己を尊び、他我を尊ぶ心であり、人類平等の大慈悲に生きることである。

日本の存在が真に世界の平和を決定し、永久に人類幸福の柱石となる時に、大和は日本のためのみの大和でなくて、世界人類のための大和となる。日本建国の使命はこゝにある。

民族の真の指導精神は唯、仏教にのみあると共に、やがて全人類を救う光もまた唯、涅槃からのみ流れ出るであろう。

我等は仏教徒である。

更にその真髓の發揮されたる親鸞教徒であり、

特に、明確に、そのことを自覚し生活せんとする光明団々員である。

一本の強固なる杭が時に一郡を一県を一地方を決定する。